蓮成院本類聚名義抄攷（一）

岡田希雄

一

蓮成院本類聚名義抄の殘缺三冊のことは、伴信友の伴氏校本附言に解説が見えて居るが、自分は單に其の中の一部分たる雜の部一冊を見ること出來るだけであつて（京都大學文學部國語國文學研究室に信友の持つて居た本の寫しが存する）他の部は現在のところでは眼福を得る機會の全然ありさうにも無いものであるから從うてこゝに斯う云ふ解説めいた物を物すると云ふことは困難であり、又をこがましき次第でもあるのだが、嘗て西念寺本を、其の本を見もせないで解説を書いて見た事も

あるので、今また其の例に倣つて、伴氏校本の校合や附言の語るところを敷衍して、まゝ自分の考ふるところを記して見むとするのである。故に材料と云へば單に伴氏校本一つあるのみである。しかも其の校本に見えた蓮成院本の解説が、極めて不親切、粗漏にして解説として甚だ物足らぬものだから、此の解説により、信友が見た殘缺本の面影をわれ〳〵が想像することは甚だ困難である。

且又其の伴氏校本も、其れが信友自ら校合した信友の手澤本では無くて、其の信友手譯本を信友の殁して丁度一年目に謄寫したところの例の名古屋の神谷克楨の本（附錄合僧下の卷末に「右十一冊借伴氏本於京師今出川御殿官舍寫訖。弘化丁未年十一月四日神谷克楨」と見えて居る）を更に新しく謄寫したものと覺しき京大國語國文學研究室本（神谷本と研究室本との關係のさだかなる事を自分は知らぬ。大學が其の神谷本を謄寫せしめたものであるか、其れとも、神谷本を何人かゞ謄寫したものを大學が、明治四十三年六月に購入したものであるか何うかを知らぬ。但し研究室本は用紙が粗惡なる所謂改良美濃紙であつて、用紙から云つても其の謄寫は極めて最近のものなることが明かに認められる）であるから材料として、信友手譯本に比べると遜色あるを否定すること出來ない。更に又彼れの古書校合の態度が、甚だ感心せ

ないものである。彼れの校合は、專ら本文として解しやすきものを作らうとする態度であつたとしか認められないものであつて、異本間の系統を窺ふための材料を對校により發見せうとする態度では無かつたらしい。われ〳〵が二書を對校する時には、本文の誤字缺脫を一本により訂補すると云ふ目的以外に、其の二本の系統的關係を知らうとする目的をも有してやるのであるが、信友のは遺憾ながらわれ〳〵のとは異り、本の系統と云ふやうな事は重視せず、否、問題とせなかつたと云ひ度い位のものである。さう云ふ主義、態度で爲された校合である以上は、われ〳〵が、校合狀態により二本の系統的關係を窺はうとすることは、困難でもあるし、又案外な結論に導れる惧れが無いとも云へまい。此の點に於いて伴氏校本は、縱ひ信友手澤本を使用するにしても、餘程愼重な態度で臨まなければならないのである。（信友の校合態度に關しては「西念寺本類聚名義抄攷」の（上）○大正十二年九月號雜文で述べて置いたから、こゝでは省略する。篤胤は古史本辭經四の四三ウ以下で信友の校合體度を別の立場から非難して居る。大矢博士の音圖及手習詞歌考○一三八頁にも非難が見える）

斯う云ふ有難くない材料により、今自分が解說することは手段に於いて、考證學上の缺陷の存するのであるから、其の云ふところも亦砂上樓閣的性質を帶びることを

免れる譯に行かないのであるが、さりとて今のところ、其の信友手澤本でさへも見ること出來ないし、無論又、蓮成院本殘缺三冊（但し雜の部を除く）を見ることも出來ないから、致し方も無き次第である。

弘化二年十一月五日、當時七十三歳であつた伴信友は、高山寺本三寶類字集殘缺一冊を「臨寫」し（事實は影寫部ちすき寫しであつたと認められる）其の未定稿の跋文の中で「去今三十三年前文化十年予陪故君侯在京之日得暮古本類聚名義抄還江戸後復得類本二種殘缺以校本篇」と述べたのであるが、其の二種の殘缺と云ふのは、西念寺本と蓮成院本との事であるから、蓮成院本名義抄は西念寺本と同じく、信友が文化十二年五月に江戸へ着いて後に得た本であるが、「類聚名義抄蓮成院本雜部叙」に見えた「文政三年十一月」と云ふ日附（赤堀氏國語學書目解題による。京都大學研究室の本にはこの日附が見えないのである）をば、彼れが蓮成院本で以て觀智院本を校合した時だとすると、其の校合は西念寺本の校合（文化十二乙亥年七月）よりは四年も後れた事となる。西念寺本は藏書に富んだ不忍文庫の藏本であつたのだが、蓮成院本も亦やはり屋代輪池の本であつたか何うかは明かで無い。但し案ずるに大方は輪池の藏本であつたのであらう。此の本は三冊の殘缺本であるのだが、其の三冊の中の「三

寶名義抄中一」（伴氏校本所載の解説の中で、信友は「三寶名義抄」と書いてあると云つて居る場合もあり、又他のところでは「三寶名義類聚抄」と書いてあると云つて居る場合もあつて一致せないが爲めに何れが宜しいのであるかに就いて迷はざるを得ない）と題してある卷の卷首に「蓮成院」の三字が見えて居るが爲めに便宜上、蓮成院本と稱せられて居るものであるが、其の蓮成院なる寺院の所在地は不明である。それで信友は

奈良興福寺中多聞院舊記云、文祿三年關白秀次公見蓮成院所藏書命謄寫上之、蓮成院者興福寺子院也、蓋是歟

と云つて居るが果して何うであらうか。大日本寺院總覽により調べて見ると、蓮乘院、蓮成寺と云ふやうな名稱の寺院は相當に見當るのであるが、蓮成院と云ふのはたゞ一箇寺、秋田縣由利郡象潟町大越に存するのが見えて居るだけであるやうだが、此のやうな邊鄙な地の寺院と名義抄との間に關係がありさうにも想はれない。寺院總覽には收載漏れの寺院も存するのは事實であるから、或ひはさう云ふ收載漏れの寺院の中に、蓮成院と云ふのが存するのであるかも知れない。しかし恐らくは、明治維新の際の偏狹野蠻な排佛棄釋政策の犧牲として退轉してしまつた多くの寺院の

中の一つであらうと解するのが至當であらう。

二

蓮成院本は今云つたやうに、殘缺本三冊であるが、其れが古寫本(例へば室町時代を下らぬとか、更に時代が古いとか云ふやうな古寫本)の殘缺であるのか、比較的新しい例へば德川時代初期以後の寫本の殘缺であると云ふのかゞ判らぬ。しかし、信友の說明では、所謂古寫本の部類に屬するものゝ如くである。其の用紙の如何と云ふ事も判らぬ。裝釘も普通の袋綴の冊子本の殘缺であつたのか、其れとも又、觀智院本の如き所謂粘帖綴であつたのかゞ、信友の解說餘りに粗にして少しも言及して居ないので、想像しかねるが、恐く元來は粘帖綴の本の殘缺であつたらうと想像する。

ところで各半葉の行數段數は何うであつたらうか。蓮成院雜部が、蓮成院本其の儘の面影を存して居ると假定するならば――しかして常識上無論然う認める外は無いのであるが――各半葉には縱七等分橫四等分、卽ち二十八箇の枠を有して居つたらしい事を認めなければならない。而して事實は高山寺本と同じく七行四段詰めであつて、觀智院本の如くに八行四段詰めでは無かつたと信ぜられる。

(附記)尤も此の點に關して觀智院本の如く八行四段詰で無かつたかと云ふ異論が

出ないでも無いから、念の爲めに其の點に言及して置かう。

殘缺本の中「三寶名義抄中一」と題書してあるものに就いて信友は

就中一冊題書三寶名義抄中一（三十七紙）則此書之別稱也。篇端署云蓮成院……從水至衣二十部（與本篇合）而水部存、言部中×字以下缺亡（以上爲一冊）

と云つて居るが、此の説明によれば其の冊は水部（及び其の次ぎの冫部）は首尾完備して居り、言部だけが×字（活字に無いと思ふから符號で濟ませて置く。言篇に畾を旁とした文字である。今後も符號で文字を代用させる事が多いことを一言斷つて置く）まで存し、×字の次ぎの字より缺けて居ると云ふ事と認める外は無い。しかして現に伴氏校本を見るに水部及び冫部は全部、又言部は×字までのところには蓮成院本との校合が存するのである。さて蓮成院本は水部の始めから言部×字までが三十七紙であつたと云ふ。其の×字が第三十七紙の裏の最終行に存するのか、中程に存するのか、又は第三十七紙の表の最終行に存するのか、それともに中程に存するのか、是れらの事も亦信友の説明粗漏にして知る由も無いが、恐くは第三十七紙の裏の最終行の最後が×字であると云ふのであらう。ともあれ、×字までのところが三十七紙であつたのである。

しかも是の三十七紙の中には更に少くとも、一紙分の部首目次(後に其れを引用する)が含まれて居るものに相違ないから、蓮成院本の本文は三十六紙であつたらしい。(更に目次の紙が、も一枚存したとすれば、本文は三十五紙であつたことになる。但し目次は一枚しか無かつたと見る方が穩當であらう)とにかく水部の始めから言部の×字までが蓮成院本では三十六紙であつた筈であるが、觀智院本では三十四紙と三行とになつて居る。

しかして、蓮成院本の水部の始めから×字に至るまでの内容を觀智院本に比較すると、收載せられた語彙や註文が殆んど同じであつて、しかも蓮成院の本が觀智院本よりは幾分か豐富である事を認めなければならない。是れは伴氏校本の校合を檢すれば容易に首肯できる筈のものである。

蓮成院本と觀智院本とは同じ名義抄であり、しかも伴氏校本の校合狀態によれば、異本關係に在るものらしい事が容易に想像できるものである(此の中は後に說明する)。しかも何れも辭書として、文字配列に就いては特別の考慮のめぐらされて居る事の認容せられるものである。其の内容又相匹敵してたゞ蓮成院本の方が幾分豐富なるべき事も亦認められうるのである。斯う云ふ二本の

間に於いて、或る文字より或る文字に至る紙數が殆んど一致し、たゞ僅か二紙の相異が存するに過ぎず、其の一方の本の行數が不明である場合には、兩本に於いて、各半葉の行數段數が同一であることを想像することは出來ても、內容の豐富なる遙成院本の行數段數が、觀智院本の其れよりも少からうとは到底想像のできないところである。常識上殆んど異論の生じうべき所では無いと云ひ得る、兩本は同一の行數段數であつたが、遙成院本の方が內容が幾增分加したので二紙の相異が生じたものと解すべきであらうと見られる。假りに、觀智院本と同じ內容のものを七行四段詰めにすれば八行四段詰めで三十四紙に相當する內容は、三十八紙分のものと成る。要するに此の二本何れも八行四段詰めであつたものだらうと云ふ結論に達するのである。

がしかし、右の如き推測は實は肯綮に中つて居ないらしい。蓋し信友の言によると「本篇（即ち觀智院本）聯屬上所載本字者下略之、例書一某、某一（如水字下書大一海一）者多、遙成院本隸本字下制行分書、其分書者混在分注中或裂在左右行加之寫誤甚多、有殆不可讀者」と云ふ事である。是れは、詳述すると云ふと、觀智院本では水と云ふ字を擧げると其の熟字、例へば「大水」「海水」の如きは「大一」「海一」と云ふ風に書き、水字と同

じ大きさで水字の次ぎに書き續けて居るが、蓮成院本では「大—」「海—」が、水字の下に分註にしてあると云ふ事である。信友は水字の例を擧げたが實は信友に誤解が存する故自分は引用例が妥當であると考へないので「河」字に例を取ると、

河（上河カハ 禾又カ）　天—アマノカハ（天—同 牛天—キノウツホノ水）　漢—同　銀—同　牛天—キノウツホノ水（觀智院本）

河（上河カハ 禾又カ）　天—アマノカハ　漢—同　銀—同（蓮成院本）

と云ふ風な相異が存すると云ふ意味の事である。斯う云ふ風に分註にしてあるのを見れば蓮成院本は、内容は觀智院本より增加しても其の割合に用紙は節約できる筈であるから、七行四段詰であるにしても、實際上何等不都合は生ぜないのである。だから觀智院本が八行四段詰であるにしても蓮成院本は其れと異り七行四段詰であつてもかまはない。しかして七行四段詰と云ふのも無論蓮成院本の元來の體裁なのであらうと認められる。元來八行四段詰めであつたものを、後の轉寫者が用紙を節約するつもりで、底本には細書分註して無いものまでも新に細書するとなると、單に謄寫するのに比して多大の勞力を要する。單に謄寫するだけでも甚だ面倒なるに、更に體裁までも改めると云ふやうな事は、書寫する當人として煩に堪へないであらうと考へられるからである。

斯う云ふ行數段數の穿鑿は、一見無用の事であるかの如くであるが、名義抄各異本の關係を想像する上に於いて、一つの考察點となるものであるから、敢て冗説したものである。信友の解説の粗漏であるのが返す〳〵も遺憾である。

三

さて此の殘缺三冊のうち「三寶名義抄中一」と題してある冊は既述の如く三十七紙、其の卷端に

爲頌曰　法上

一水ホイシ　二冫ヒラク　三言コン　四足ソク足　五立リウ音
六豆豊　七卜小ク ヒ 上　八面　九齒シ　十山セン
十一石シヤク　十二玉コク 王　十三色シキ　十四邑オフ 阝在字右　十五阜フ 阝在字左
十六土土　十七心小シン　十八巾キン　十九糸ヘク　二十衣エ 衣

雖言　右は伴氏校本により大體忠實にこゝに寫したが、二・三説明を加ふ可きものがある。(一)のシは水に對する「三水」の義、(四)の足は上の方のものが活字式の字形とは成らないで、われ〳〵が通常行書體に書く時の如き字體即ち六讀式と成つて居る、註文中のものは簡略として使用せられた場合の活字式である。(七)の「小ク」は「ホク」の義、註文中のヒ上はトと云ふ部首中に便宜的に含まれて居る部首の義である。(十六)で註文中の文字が土であるは觀智院本に比較すると士の誤

り。(十九)の糸字に「ヘク」と音註が施してあるのは誤では無い(此の事「國史と國文」昭和四年三月號所載拙稿に述べて置いた)。(二十)の衣が何れも衣とあるはよろしく無い、觀智院本の如く註文中の衣は衾で無ければならぬ。

と見えて居る由、作氏校本第五冊の卷頭に朱筆で註記してある。つまり是れが此の冊の部首目次であつて、其れがやはり觀智院本同樣に「頌」の型式と成つて居つたもの なる事が判る。さて此の二十箇の部首が存することを思へば、此の冊は觀智院本では第五(法上冊)第六(法中冊)の兩冊の全部に相當する筈であるが、實際惜しいことにも、前には云つたやうに、水部の始めからはじまつて水部及び〻部全部は存するが、續く言部は×字で終り、あとは存せないのである。卽ち蓮成院本の此の冊は觀智院本第五第六の兩冊の紙數から云へば、少くとも百三十紙位の分量であつた筈であるが、其れが三十七紙だけ殘り、他は破れ失せたものと察せられる。

又他の一冊は、表紙に「僧上」と書いてあつて七十二紙存するのであるが、內容は艸部の始めの方が闕けてしまつて、菴蘆(觀智院本八ノ六ウ三)始まり袈裟と成り居るところの紙の表側、又は裏側が半ば破れ失せて其の面の中程にある菴蘆と云ふ熟字から始まつて居ると云ふ譯では無くて、表か裏か、とにかく其の面だけは完全に殘り居り、其の面の第一行第一段に菴蘆の二字が存すると云ふことであらう。是れも亦蓮成院本其の物

を見れば直ぐ判ることである）竹・力・刀・羽・毛・食・金（以上八部は觀智院本第八卷の大部分に當る）宀・囗・皿・弓・方（以上五部は觀智院本第九卷の一部分に相當する）酉（觀智院本第十卷の中）戈・欠・文・攴・殳（以上五種の部首は觀智院本第九卷の中に收められる）等十九種の部首に屬するものが收載せられてあるから、從うて此の卷に「僧上」と標してあつても其の內容が觀智院本の「僧上」卷卽ち第八卷と一致する譯では無い。

ところで斯くの如き事實が存するのを見ると此の蓮成院本の僧上の卷は、其の原本であるところの作者自筆草本が既でに此の通りの狀態であつたのだらうと考へられないことも無いが、實は然うでは無くて原本では各卷に收載せられてあつたのであるが――丁度觀智院本に於いて現在見るが如くに――或る時期に於いて、蓮成院本の原形が破壞せられて各卷が散亂し、其の殘缺が再び編められるに至つた時に、斯う云ふ亂雜な形と變形してしまつたものだらうと考へられる。信友もやはり

蓋此本後人得殘缺本集錯簡之零紙拾蟲鼠之損餘輯綴爲卷者也故至如是類

と云つて居る。

さて殘りの一冊は表紙に僧中と書いてあるが、內容は觀智院本の僧中（第九卷）僧下（第十卷）の兩卷に相當するのだから、云ふまでも無く、是れも亦今の「僧上」の卷と同じく後人がよい加減に「僧中」の卷と決めたものであらう。紙數七十八枚あり、車部の轜字（觀智院本九ノ

四六才四より始り、羊・馬・鳥・隹（以上五部は觀智院本第九卷の中）魚・虫・鼠・龜・鬼・風（以上六部は觀智院本第十卷中に收められる）爪・瓦・缶・斤・矢・矛（以上六部は觀智院本第九卷の中にあり）など十七種の部首に屬すする文字が集めてあり、なほ雜部（觀智院本第十卷の中）が添へられて居る。此の「僧中」の卷の內容からでも蓮成院本が各卷の殘缺をよせ集めて三冊としたものであることが首肯せられるであらう。

右に述べたところの蓮成院本と觀智院本との內容上の比較を一目瞭然たらしめる爲めに、左に判り易く記載して見る。

◎觀智院本

（法上○第五冊）水 氵 言……（三寶名義抄中一）

足 立 豆 卜 面 齒 山……（同）

（法中○第六冊）石 玉 色 邑 阜 土

心 巾 糸 衣……（同）

（僧上○第八冊）艸 竹 力 刀 羽 毛

食 金……（僧上）

（僧中○第九冊）人……（同右）

爪……（僧中）

右但し本文缺く

◎蓮成院本

右但し本文缺く

皿……（僧上）
瓦器……（僧中）
弓……（僧上）
矢……（僧中）
斤矛……（同右）
戈欠又支殳……（僧上）
車羊馬鳥隹……（僧中）
（僧下第十〇冊）魚虫鼠龜鬼風……（同右）
酉……（僧上）
雜……（僧中）

四

さて達成院本の殘缺三冊（但し其の中便宜上雜部だけは取り離して云ふ）を觀智院本に對校した信友は

……又有數字或數行錯置者又有與旁行中之字互混淆者又有本字混分注者蓋此本後人得殘缺本集錯簡之零紙拾虫鼠之損餘輯綴爲卷者也。故至如是類今不校

取

と云つた。餘程校合が困難であつたらしい。しかし校合に堪へないと云ふ程では無かつたらしい。(「數字或數行錯置」と云ふ事の解釋も後に於いて述べるであらう。「今不二校取一」と云つて居るのは、校合態度として排斥すべきものである。)

しかし雜部に至りては、二本の間に甚しき相異が存し、其の結果校合が不可能である爲めに、信友は「不二堪一對校一」と云つて雜部だけを切り離して別冊となし、是れに序を加へて伴氏校本に添附したのである。其の序文は左の如きものである。

附類聚名義抄蓮成院本雜部序

余嘗寫二舊本類聚名義抄一復見二蓮成院本者一對二校本篇一(○觀智院本の事也)記二其異者一唯於僧帙中卷之末、矛部之次分爲二雜門一立二六十五、目次存焉卽舊本下卷(○觀智院本僧下卷の誤)之末第一百廿條首字以下至二卷尾一者也、校二之舊本大有二不一同者一且就二目次一檢其篇中一并幸隷丁乞麻之部參互赤出之部及從二尾至一雜之十一部無一之、蓋缺逸也、今不二耐一對校一別鈔寫之爲一一卷(十二紙)附二之本篇僧帙之下卷一以備二他日按讎一云文政三年十一月伴信友記。

この序は國語學書目解題(五四一頁)にも全文が引用せられて居るから、今また之れを引用するにも及ばない筈であるが、書目解題中に見えたものと、當大學國語研究室の本に

見えて居るものとは、小異があるので、ことさらに引用したのである。(右の文中、黒點を附した文字は書目解題に見えた序文に存し乍らも、研究室の本には無きもの、また白圈を附したものは其の反對である。卷字の下の「二十七紙」と云ふ註文も研究室本には見えないが、黒點を附するのは印刷上の都合が惡いので、其のまゝにしたのである。)さて其の研究室の所藏本と云ふのは卷尾に

天保五甲午年夏五月以伊州五郎藏書謄寫　田澤仲舒

とあるものであつて、天保五年卽ち信友存生中に—此の頃は信友、江戸に居つたやうである——田澤仲舒が信友の藏書を直接に借り出して謄寫した本であるから、本の素性から云へば確かな信頼するに足るものである。信友の本が殘缺本を影寫したものであるか、謄寫したものであるかは判らぬが、謄寫であるにしても忠實なものであつたらしい事は虫損の後の存することなどから察せられる。

蓮成院本類聚名義抄攷（二）

岡田希雄

五

蓮成院本雜部の序を引用したのに因みて、其の雜部に就いて簡單な解說を試みる。さて雜部を見ると第一に氣附くのは、明細で要領を得た目次(其の目次は必ずしも部首目次とは云へない。目次に現はれて居る文字の中には、後に全部を掲載するのを見ればわかる如くに、所謂康熙字典式部首の範疇に入らぬ物の方が寧ろ多いのである)の存する事である。しかして斯う云ふものは觀智院本の方では其の雜部のはじめの所に全然見えないのである。ところで其の目次は、其れが何時頃より此の雜部のはじめの所に書き添へられて居るのであるかが明で無い。詳しく云ふと(一)目次は蓮成院本の原本たる作者自筆草本にも既に存して居つたものであるか(二)それとも本書の作者自身が書き添へたものでは無くて、後人が何かの都合で書き加へたものであるのかと云ふ事が明瞭で無い、そしてかゝる問題は此の目次のみに就いて考へて見たところで解決のつく筈のものでは無いから、他に何か役に立つ可き材料は無

いかと目を他に轉じなければならぬ。ところが此處に此の目次の時代に關する問題の解決に何か暗示を與へるものゝあるのを知る。其れは先き程引用した信友の序にも指摘してある通りに、雜部に於いては其の目次と實際の內容とが、殊には其の順序が一致せない點があると云ふ事實である。左に目次と內容とを揭げ其の一致せぬ點を明かにせう。（信友は「立部六十五、目次存焉」と云つて居るが、其の目次の始めと終りに雜字があるから、恰も六十七箇の部首があるかの如く見えるのだが始めの方の雜字は雜部と云ふ意味であらうから、これは省いても可からうが、終りの雜字は取り除く譯には行かぬ。と云ふのは此の雜部を觀智院本と比較して見ると云ふと、蓮成院本の方は凸部やそれに續く雜の部が缺けて居るから實際の事はわからないが、やはり觀智院本の如く、凸部の次ぎに、樣々な字が雜然と集められてある一部類のあつたらしい事が想像出來るからである。さて此の六十六の部首――嚴密に云へば部首で無いものゝ方が多い事は既に述べた通りであるが、便宜上部首と云ふ用語を使用する――の中には更に其の小區分とも云ふ可きものが注してあるものがある、例へば甘部の下に「甚其」の二字を小さく注記して、此の甘部に屬する字の所へ、甚を傍とする文字（甚字は甘部に屬する字であるが甚字を旁とする如き文字は必ずしも甘部に屬しては居ないのであるや）「其」字と關係ある文

字（「其」字は康熙字典では八部に屬する文字である）をも收容して居ると云ふ事を示して居るが如きが其の一例であるが、かゝる種類の甚字其字等の如きも、今は必要無いのだが後になつてから役に立つから書き添へて置く。又目次の順序を示す數字も後の爲めに添へるのであつて、今直接役に立つ譯では無い。括弧を添へた數字は實際の内容に於ける順序を示すものである。さて部首の中には面倒な文字がかなりあつて、記號で濟ませる事が出來ないので、平假字の中から都合のよい字（片假字は部首と紛れる心配があるので故らに平假字を使ふのである）を選び出して代用する事にしそれらに關しては、或る程度まで解説を加へる事にした。

（目次）	（内容）	（目次）	（内容）	（目次）	（内容）
1 首 あ 百直	首(1)	8 臼 ロ	臼(8)	15 章	章(15)
2 自 日かさ 且	自(2)	9 匈 囲 圖	匈(9)	16 黄	黄(16)
3 甘 蓋 寞	甘(3)	10 門 高	門(10)	17 赤	×
4 た	た(4)	11 内 肉	内(11)	18 出 中	×
5. 龍 育 ホ	龍(5)	12 司 旬 包	司(12)	19 生 主 圭	生(17)
6 嬴	な(6)	13 南 や 宮	南(13)	20 老 ま	老(18)
7 臼 學 ば ま	臼(7)	14 高 高 亨	高(14)	21 男	男(19)

36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22
非	卵	王	至	此	不	甫	ら	番	更	車	由	夷	民	臣
非	卵	王	至	此	不	甫	ら	番	更	車	由	夷	民	臣
(34)	(33)	(32)	(31)	(30)	(29)	(28)	(27)	(26)	(25)	(24)	(23)	(22)	(21)	(20)

51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37
幸	井	く	吉	云	ム	厂	正	ひ	束	少	壹	き	奏	夋
幸	井	く	吉	云	ム	厂	正	ひ	束	少	壹	き	奏	夋
(48)	(47)	(53)	(52)	(51)	(50)	(43)	(42)	(41)	(40)	(39)	(38)	(37)	(36)	(35)

66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52
雜	凸	巳	每	尹	艮	緣	必	馨	与	尾	麻	乞	丐	隶
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	麻	乞	丐	隶
											(46)	(45)	44)	(49)

（註）（あ）は首字の正體なる川の下に百を書いた字

（か）は卩の下に酉を書いた字

（た）は青字を篇とし光字を旁とした形の文字

（5）（22）（51）のホは等字である

（は）は字形を示す手段を考へ得ないので省略する

（ま）は日の下に日を書いた字

（ら）立字の下へ未字を書いた字

（き）初の下に合を書いた字

（ひ）未文を左右に並べ其の下へ厂を書き來字の異體を書いた字

（み）火の下へ子または小を書いた字

（さ）は卩目一を合せた形の字

（や）鬲字の異體である

（わ）湖字の旁によく似た字形

（ち）（に）字形を示す方法を考へ得ない

目次と内容との關係は右の如くであるから、つまる所、目次と内容との不一致と云ふ事は、

（一）目次にある「赤」「出」の二部は實際の内容には見えない

（二）「尾」部から雜に至る十一部も亦目次には出て居るが實際は無い

（三）「丐」「乞」「麻」の三部の位置が目次と實際の内容とで相違がある

（四）「井」「幸」「隶」の三部の位置が目次と實際とでかはつて居る

(五)「厶」「云」「吉」「く」の四部の位置も亦さうである

と云ふ五つの點である。そしてかゝる不一致が如何にして生じたであらうかと云ふ事を考察する事は、此の目次の添へられた時代を考察する事と密接な關係を有するのであると自分は考へる。

目次がある、しかもそれが實際の內容とは一致せないと云ふ二つの事實がある以上は、目次か內容かの何れか一方に、何かの事情が存して居るのに相違ないのである、(一)目次は蓮成院の原本なる作者筆草本、若しくは其の作者自筆草本を忠實に傳へた轉寫本にも既に添へられてあつたのだ、しかし其の順序は其の後に於いても何等變化はして居ないのだが、肝心の實際の內容の方に變化が生じたので其の結果、目次と本文の內容とが一致せないのだと云ふやうな事情があるのであるか(二)其の逆に內容は作者自筆草本當時の儘である――もとより轉寫の際に生じる文字の僅かな誤寫の存するは無論これを認める――のだが目次の方が、はるか後の人の手になつた好い加減なものである(其の意味は目次が、作者自筆草本當時の蓮成院本雜部の面影を忠實に傳へて居ないと云ふ事である)ため目次と內容とが一致せないのだと云ふやうな事情があるのか、と云ふ兩樣の疑ひが生じうるが、史的事實としては無論何れ

か一方である。尤も更に深く疑うて見れば、目次の方はもとより遙かの後の人の手に成つた好い加減のものであるが、一方では其の内容も亦、作者自筆草本に比べると相當大きな變化を蒙つて居るのではあるまいかとも考へられるのであるが、さう云ふ疑ひの上に立脚して目次と内容との關係を説明せうとしても、其れは現在自分の使用し得る材料位では全く説明が不可能であるから自分は、さう云ふ極めて特殊な事情は存せないものと假定した上で論を進めて行かうと思ふ。さてかくの如く假定した上でも一度先き程述べた目次と内容との間に絡る事情として想像せられるものを顧慮すると云ふと、こゝに目次と内容との關係は

(一)目次が原本なる作者自筆草本、若しくは作者自筆草本と見做しても差支へ無い位に忠實に原本の面影を寫し傳へて居たところの轉寫本に存して居たのだとすると、其の目次と一致せぬ實際の内容の方に或る變化が生じたのであると云ひ得る

(二)目次をば後人の手に成つた好い加減なものと假定すると、内容の方が正しいのであらうと云へる

と云ふ二種の解釋が可能であるから從つてこれを逆に考へて見ると、

(甲)內容の方に變化の生じた形跡の無い事がわかり、內容は忠實に作者自筆草本の面影と傳へて居るのだと云ふ事が明かになるならば目次の方が好い加減のもので信頼出來ないものだと云ふ事になる

(乙)又其の反對に、內容の方に變化の生じた形跡のある事が明かであるならば、其の內容と一致せぬ目次の方は、內容が現在の如く變化しない以前に於いて、既に雜部に添へられて居るものである。

と云ふ事が可能である。從つて自分は、此の目次と內容との關係を明かにする爲めには、雜部の內容に變化が生じたと見る可き形跡があるかどうかを吟味せなければならぬと考へる。

ところが、書籍と云ふものは概して、其の內容卽ち本文に於いては種々の原因に基く錯簡脫簡――それには數字乃至數十字のもあれば一行乃至數行、一紙乃至數紙のものもある――の生じ易き傾向のあるものである。現今の如き冊子本でしかも丁數頁數の記入してあるものにはかゝる憂ひは絕無と云つても可いが、卷子本に於いても生じ、袋草子に於いても生じ、又古き時代に一般に行はれた所謂粘葉綴のものに於いては虫鼠の食害があるため(卽ち綴目の所を虫や鼠が食たりし、又さなくとも綴

目が切れたりする爲め錯簡脱簡も極めて有り勝ちの事であつた。だから元暦校本萬葉集にもこれがあるし御物更科日記にもあるし、又名義抄中で唯一の完全な本と認められて居る觀智院本にも案外にも何時どうして生じたのか知らないが第五卷に五丁から八丁に至る間に錯簡がある。（其の事は何れ後於いて詳しく述べる）ところで蓮成院殘缺本（西念寺本を說く場合に、西念寺殘缺本、西念寺完本の區別をした例に倣ひ、蓮成院本も三冊の殘缺本を蓮成院殘缺本と呼び、殘缺本にならぬ以前の完全であつた筈の本――これが現存して居るか如何は不明であるが、嘗ては存して居つたらうと云ふ事は想像が許される――を蓮成院完本と呼ぶ事とする。但し例により此の區別をたてる必要を認めぬ時は單に蓮成院本と呼ぶに過ぎない）の前身たるべき蓮成院完本が粘葉であつたかどうかはもとより不明であるが、粘葉であつたのでは無からうかと云ふ疑ひは充分にある。がそれはさて措き、蓮成院完本が粘葉であつたがためであるかどうか知らないが、此の殘缺本には雜部以外のところに於いて、既に述べた事のある通りに甚しい錯簡脱簡が存するのである。そして信友は其の原因をば虫鼠の所業に歸して居る。多分其のやうな事でもあらうが、何れにしても、雜部以外に甚しい錯簡脱簡のあると云ふ事から類推して、雜部に於いても亦錯簡脱簡のあるらしい事が想

像出來る。殊に觀智院本の雜部と比較する時は、よし此の二本が全然別種の本であるにしても、説明が出來ぬ位に甚しい相違のあると云ふ事により、右の想像はいよいよ強められる。しかも次の如き事實も存するのである。

蓮成院本雜部十丁左から十一丁右へかゝるところを見ると、十丁左七行目の終りは黄部に屬する蘄字（觀智院本一ノ四三ウ四）で終つて居るのに、十一丁右一行目の最初の字は粔字（此の字は後にも二三度出るから図印で示すことゝする）であつて全く黄部とは關係が無い。關係の無いのも道理であつて、此の図字は黄部に屬する字では無くて、觀智院本一〇ノ四四十五に比べて明かである如く（但し字形は觀智院本と蓮成院本とで小異がある）中部（蓮成院本では出部の中）に屬する字である。從つて此の事實から蓮成院本雜部十丁左七行四段目と十一丁右一行一段目との間に脱簡のある事がわかる。

又厂部を見るに、此の部は二十二丁左七行目から始まりて、そこには唯の六字しか無い。ところが二十四丁左から二十五丁右へかゝるところを見ると二十四丁左には隷部の字が正俗取りまぜて二十五字掲げられ、しかも第七行三段目で終つて居る、從つて隷部に屬する文字は此の二十五字で全部である事がわかる、然るに二十五丁右を見ると突然第一行一段目から厂部に屬すると見る外説明の出來ぬ文字で始ま

り、此の類の文字が全部で十八字、三行に亙つて掲載せられて居り、さて新たに厶部に屬する字の掲載が始まつて居るのであるが厂部に屬する文字二十四字がかくの如く分割せられて居るのを見ると、こゝに二十二丁から二十五丁に至る間に錯簡の存するのを認めないでは居られない。

とに角右の如き二つの事實がある以上は、雜部に錯簡脱簡のあると云ふ事は單なる想像では無くて事實であると云はねばならぬ。

さてかくして、雜部の内容の方に錯簡脱簡のある事、卽ち内容は作者自筆草本當時の儘で傳はつて居るのでは無い、虫鼠の所業か何かゝ原因となつて、大きな變化を受けたのだと云ふ事が明かになつた以上、此の事實だけで自分の論法から云へば(乙)の解釋からして、目次の方は内容の變化せぬ前からあるものだと云ひ得る譯であるが、念の爲めに目次の方に就いても一寸吟味して見るに、目次は一度誰か(著者自身にてもあれ、後人にてもあれ)により書き添へられた以上は、この方には變化が生じる筈が無いと云へる。蓋し目次は何と云つても僅か二紙に亙るに過ぎないものであるから、これに虫鼠の加へた破壞に基く錯簡脱簡が生じ得る餘地のある事を認められないからである。又目次は其の性質として必ず、目次により代表せられて居る内容の

最初に掲載せられてある筈だから、從つてこれが轉寫せられる場合に於いても、謄寫の最初に、卽ち謄寫する人の注意力が未だ鈍くならぬ中に寫されるもの故、いかに不注意な謄寫者も誤寫する心配は無い(雜部だけが獨立して一卷を占領して居ずに、他の卷中に寄食して居る狀態(建成院本觀智院本何れもさうである)にあるにしても、目次があつて一纒めになつて居る以上、謄寫者の氣分がそこで一轉し從つて既に鈍つて居た注意力が、再び蘇生するのは明かな事實である(かゝる事は書物を謄寫した經驗のある人には說明の必要が無かろう)から、やはり注意力の鈍る事にもとづく誤寫は生じないと見る方が穩當である)。

さて目次があり、しかもそれが實際の內容と一致せないと云ふ事實があり、一方では其の內容には變化の生じた事が指摘せられ、目次の方には變化の生じた心配の無いと云事實がある以上、自分は目次の方が正しいのである、內容が現在の如くに變化しない時分から、既に目次はあつたのだから、內容の順序は信用出來ないが目次の方は安心して信用出來るのであると斷言するのを憚らぬのである(內容の變化が更に一回乃至數回行はれたのではあるまいかと疑へば疑ひ得るが、其の疑ひに對する解決は不可能である。懷疑的態度も甚だ結構であるが、そこ迄深入りする必要は無いと信じるのである)。

そしてかくの如き結論に達した今、先き程雜部の內容に錯簡脫簡が存すると云ふ證據に擧げた囚字や厂部の事を再び考へて見ると、錯簡脫簡の事實がよく理解せられると思ふ。先づ厂部の方は厂部に屬する全部で二十四字が二紙に亙つて記され、この一群の文字が二部分に分たれ其の間の緊密が缺けたと云ふ隙に乘じて、丐乞麻井幸隷等六部に屬する文字群（しかも此の六部の間にも亦錯簡があるのだ）が浸入し來つたのであり、又囚字の方は、黃部と生部、卽ち十丁左と十一丁右との間に脫簡が生じて、赤出の二部が脫落してしまつたのであるが（此の脫簡の際に、黃部が伴つて脫落したらしい事は、これ亦觀智院本との比較によりわかるのである）其の時出部の文字が二紙に亙つて記されてあつたゝめに、最後に位する二字（囚字と其の次ぎに位する文字）だけが幸ひにも取り殘されたのであらうと云ふ事がよく理解せらる。（因みに云ふ、十丁と十一丁との間の脫簡は、脫落したのが黃部の一部分と赤部の全部、出部の大部分であるところから考へるに、多分一枚だけの脫簡であつたらうと想はれる。そして又今あげた其の錯簡脫簡が何れも一紙又は數紙で何れも全紙であるのと見ると、遠成院完本は遠成院殘缺本――此の本の體裁は信友の寫本によつて伺はれる――と行數段數が同じであつたに相違ない、蓋し行數段數が異つて居るならば、都合よく一紙又は數紙が脫落し、或

ひは錯置せられると云ふ筈が無いからであるから、此の事から蓮成院本の行數、換言すれば蓮成院本の作者自筆草本の行數が七行であつた事が想像せられるであらう。

さて蓮成院本雜部目次が、雜部が現在見るが如くに變化を受けない以前から存して居つたものである事が明かになつたが、しかし作者自ら書き添へて置いたものであるか、それとも後人が蓮成院本雜部の體裁が變化せない以前、卽ち未だ作者自筆草本の面影を忠實に傳へて居た頃に、書き添へて置いたものであるかは明かで無い。だが目次の添へられてない觀智院本の體裁と、目次の添へられた蓮成院本のそれとは、何れが進歩した形であるかと云へば、云ふ迄も無く蓮成院本の方に團扇をあげなければならない。

自分は最初蓮成院本雜部につきて、簡單な解說を物する心算であつたが、案外にも目次と內容との關係と云ふ一事項の考察に餘りに長い時間を費したのである。で雜部に就きての解說は一と先づこれにて切り上げて、觀智院本と蓮成院本との比較に移らう。

蓮成院本類聚名義抄攷（三）

岡田希雄

六

觀智院本と蓮成院本との關係を考察するに當り、先づ明かに爲なければならない事は、此の二本のそれ〴〵の原本たる作者自筆本なるものが、同一のものであつたか、其れとも異種のものであつたかと云ふ事であるが――念の爲めに斷つて置くが、觀智院古寫本が先づ〳〵作者自筆本を忠實に傳へて居ると云ふ事、また信友の見たところの蓮成院殘缺本が是れまた其の作者自筆草本と先づ〳〵相異ないであらうと云ふ事を假定し、是れらの兩本を比較しさへすれば、是れら兩方の原本たる作者自筆本の關係を想像することできるであらうと云ふ事を假定した上での事である――伴氏校本に記入せられてある二本の相異から察すると、此の二本の原本が別種の本であつた事を推定してよいと考へる。さて二本間の相異としては左記の如きものを擧げることが出來るであらう。

一 說明の施されてある文字の數に就いて云ふときは觀智院本よりも蓮成院本の方

が多い。

二また其れらの文字の註文の多寡と云ふ點に於いても相異がある。觀智院本よりも蓮成院本の方が多いのである。

三或る文字に附屬的に聯屬して居る熟字類、例へば、河字に聯屬して居る「天河」「漢河」「銀河」「牛天河」の類が、蓮成院本では分註式に細字雙行に書かれてあるが、觀智院本では概して然うは成つて居ないのである。是れは兩本の相異としては最も甚しい點である（拙稿第一回の一七・一八兩頁を見て頂きたい）。

四說明の施されてある單字熟字の排列の順序にも相異がある。但し此の種の實例の中には、蓮成院本が何しろ殘缺の寄せ集めであるのだから、從うて個々の文字どもの間に位置順序の變動が生じ、斯くて二本間の相異と成つたやうなものも相當に存する事でもあらうが、二本間に於ける文字排列の相異の全部が、さう云ふ錯簡と云ふやうな原因に基くものであるとは云へまい。錯簡の生じて居りさうにも無いと認められるところにも排列順序の相異は存するのであるから、何うしても此の二本は、別種の本であるのだと解釋せなければ說明は出來ないのである。

五雜部が兩本に於いて非常な相異の存する事である。文字、註文の多寡と云ふやう

な相異、一部首に屬する文字排列の順序の相異なども無論存するのであるが、其れらは今擧げた(一)(二)(三)(四)の中に含まれて居ることであるから、今更細說する必要も無いが、特に注意すべきは二本の間に、部首の順序の一致して居ないと云ふ事である。其の一致せないと云ふのも、蓮成院本の內容と觀智院本の內容とを比較して云ふのでは無い、蓮成院本雜部に現在見るが如き變化の生じない以前から存して居つたに相異ないところの部首目次と、觀智院本とを比較して、さて二者の間に非常な相異があると云ふのである。

左に其の比較を示さう。ところで比較を示すに當り、一言斷つて置かなければならない事がある。其れは此の二本を完全に比較することが全く不可能であると云ふ事である。そして何故完全な比較が不可能であるかと云ふと、其れは觀智院本雜部が非常に亂雜な內容を有して居るからである。一體觀智院本は、珍しくも十一冊完全に揃つて居る古寫本であるのだが、雜部以外のところがよく整頓して居るのに反し、雜部は非常に亂雜で不整頓である、一つの部首に屬する字が何れの字から何れの字までゝあるのか、部首は如何なる順序で次から次へと移り行くのであるか、一體何箇の部首に分ちて然る可きであるのか、などと云ふ事は全く明確な見當がつかない。

蓮成院本では一つの部首に纏められて居る文字どもが、觀智院本ではあちらこちら數箇所に散在して居ると云ふやうな事實は極めて普通なことであると云ふ具合であつて、始めの方と終りの方とこそは少々整つて居るとは云はゞ云へるものゝ、其の中間は全く無秩序で、亂雜不整頓其の物であると極言しても大過が無いのである。であるから、此の二本の比較はいかに骨を折つてやつて見ても、完全な效果を收めるのは不可能である事を斷つて置く次第である。で今は蓮成院本の目次に現はれた部首及び其の附屬部首(例へば「生」に對する「主」「圭」の如きもの)が觀智院本では如何なる順序になつて居るか、蓮成院本では一つの部に纏められて居る文字どもが觀智院本では如何なる狀態で、あちらこちらに散在して居るかを示すに過ぎない。そして是れを示すに適當な方法を見出し得ないのであるが、ともかく觀智院本の部首を有りの儘の順序で掲げ、それに蓮成院本に於ける順序を示す數字(此の數字と部首との關係は前回の分の中に表で示して置いた)をアラビヤ數字で記し、いかに此の數字が觀智院本に於いて亂れて居るかを明かにする事により、二本の相異を示さうとするのである。さて少々あらはれる異體文字は印刷の便を考慮して例により平假字を使用するのであり、其の平假字の其れ〳〵が如何なる文字の代用であるかは前回の分

に述べて置いたのであるが今も亦念の爲め説明して置く。附屬部首は面倒だから大體は省略する主義を取つたが、無論必要に應じて存して置く。「36〔非〕非三七左五」とあるやうな例は、〔非〕は「非」の附屬的部首であるが、觀智院本三十七丁左五行目のところには「非」を字形内に有たずして非を有つて居るやうな文字が存する（例は異體である爲めに省略して置く）と云ふ意味である。「36非四三左五」とあるのは、觀智院本四十三丁左五行目には「非」を字形中に有する文字、例へば×字（皆非の二字が縱に連れしもの、若皆反と見えて居る）の如きが存して、非を有する文字が存せないと云ふ事である。又◎印を附したものは、果して其の部首に屬する文字と認めてよいか何うかの明かならざる如きものである。

1 首 三三右一　9 刨 三三右六　29 ら 三三右六
23 民 三四右一　41 少 三四右二　30 甫 三四右三
12 司 句包三四右六　20 男 三四右七　30 甫 弗友益弼孚三四左二
29 ら 柔三四左八　31 不 三五右二　32 此 三五右八
13 高 高三五左三　7 臼 學三五左四　8 臼 三六右五
37 ◎ 三六左三　4 龍 三六左七　33 至 三六左八

34 王 三七右二
36 (非)非三七左五
52 隶 隶三八左五
42 束 來三九右四
45 厂 三九左一
45 厂 四〇右二
28 番 来乃四〇左三
9 (匋)匋四一右五
50 (井)泉四一左二
51 幸 四二右六
27 更 四二左四
17 赤 四三右二
19 生 四三左七
40 壹 四四右七
42 束 四五左一

35 卵 卵卩三七右七
41 少 三八右一
23 民 氏三八左八
39 き 三九右七
35 (卵)卩三九左三
54 乞 礼四〇右三
11 内 四〇左六
50 井 四一右八
3 甘 四一左三
47 (云)云四二右八
47 (云)云四二左五
16 黄 四三右七
18 (出)出四四右二
63 每 四五右五
25 (由)由四五左四

5 龍 三七左二
22 臣 三八右四
26 車 三九右三
35 (卵)卩三九右八
2 (自)自三九左八
5 (龍)育四〇左二
42 (束)來四一右一
49 く 巛四一左一
18 出 四二右一
22 (臣)臣四二左二
10 门 四三右一
36 非 四三左五
55 廊 四四右六
10 门 商四五右七
65 凸 四五左七

48 吉 四六右一
46 厶 口四六右七
6 亂 四七右六
38 奏 四八右一
34 丑 四八右四
8 (曰)曰四九右三
39 き 谷五〇左一
55 (麻)庶五一右五
22 臣 五一左七
56 尾 五三右三
52 (隶)隶五三左八
61 民 五五右三
39 き 五六右一
43 ひ 五八右二
15 章 五八右六

19 生 四六右三
25 (由)甲四七右一
5 (龍) 四七左六
32 (臣)臣四八右三
1 (直)道四八右六
4 蕩 五〇右二
46 厶 五〇左四
12 司 五一左一
43 ひ 五二右五
◎62 尹 五三左三
59 必 五四右四
12 (司)句五五左四
54 乞 五六右六
2 自 日五七左三
52 (隶)隶五八右八

60 辭 四六左一
50 井 四七右三
24 夷 四七左八
35 (卯)卯四八右三
47 (云)云四八右七
42 (束)東五〇右七
24 夷 五一右一
41 少 五一左六
53 (弓)弓五三右一
◎58 馨 五三左五
24 夷 五四右五
28 (番)稽五五左五
53 (弓)弓五六左三
53 (弓)弓五八右三
43 ひ 五八右八

藝　文

41 少 五九右五
13 商 五九左二
14 (高)享富六一右五
65 凸 六二右四

30 甫 五九右六
14 高 享富六〇左一
14 高 六一左一
64 已 六二左五

28 (番)高五九右八
15 章 六〇左八
20 老 ヂ六一左七

(附記)(ら)は立未二字を縦に連ねたる字。(き)は物の下に合を書いた字。(ひ)は未文二字を左右に置き其の下に丁を書き其の中に來字の異體を書きたるもの。

此の表を見れば觀智院本雜部は、文字排列が全く無秩序不整頓なること、及び蓮成院本雜部とは全然別種のものである事が一目瞭然であらう。さて雜部に於いてさへも是れ位の大きな相異が存するものである以上は、たゞ此の一事實のみで(既でに述べた(一)(二)(三)(四)等の理由が無くとも)蓮成院本と觀智院本とが別種のものである事は認め得るであらう。

要するに是れら二本間には右に述べたるが如き相異が存するのであるから、此の二本の原本たる作者自筆草本が同一の本では無かつた事は疑ひが無いと考へられ

る。

七

蓮成院本と觀智院本とが元來異種の本であることが明かに成つた以上は、其の原本の出來た時代の先後に就いても亦考察して見なければならぬ。ところが蓮成院本は雜部だけしか見ること出來ないのであるから、例により、伴氏校本に記入せられてある二本の相異を材料として、二本の時代の先後如何を考へて見ると云ふと、蓮成院本の原本の方が觀智院本の原本よりも後れて出來たのではあるまいかと云ふ想像が(論據と云ひ得る程の理由は見出し得ないもの乍ら)許されるやうに考へられる。

(一) 先づ蓮成院本にもまた和音に關する注文が見える。さて此の注文が觀智院本に見えたるものよりも數が少い場合には蓮成院本が觀智院本よりも後に成りて出來たらうと云ふのは躊躇を要するのであるが、觀智院本とほゞ等しい位存するとか、若しくは觀智院本に比較して蓮成院本の方が多いと云ふ事に成ると、蓮成院本が觀智院本よりも早く出來たと解釋するよりも、寧ろ其の反對であらうと認め得るのではあるまいか。ところで和音に關する蓮成院本の注文の樣子を伴氏校本で査べて見ると、此の伴氏校本は「滿　禾マン」(觀本五の二二左六にあり蓮本では觀本五の二一右四のところに存する)「勸　禾火ン」(和音はクワンの聲　觀本八の四二右八)「洗

禾セイ　藝　文　セン（觀本五の二右四）の如く二本の何れにも和音に關する注文の存し乍ら、たゞ注文の記載せられてある場所のみが少々異つて居ると云ふやうなものをも丁寧に注意して居るし、又

舍 觀本九の一右八ロシキ 蓮本 禾シヤ

蜈蚣 觀本一〇の九左四禾云コ、 蓮本 禾コウク

の如き、ほんの瑣細な轉寫の相異と覺しきものも記して居るし、又

殺 觀本一〇の三三左四禾セチ 蓮本 又音セチ

敵 觀本一〇の三三左六禾チヤク 蓮本 又音チヤク

の如くに、蓮成院本で和音云々と書いて無くて、觀智院本では和音云々と成つて居るものも亦、むろん注記して居る事から察すると、伴氏校本に二本間の相異につきて何等注意して居ないやうな和云々の注文は、此の二本間ですべて一致するものと認めなければならない。又事實一致するやうであると云ふ事は、此の二本の雜部に見えた和音に關する注文の比較によりても云へると思ふ。雜部の中で蓮成院本にも見え觀智院本にも見えて居る文字で、和音の注してあるものは自分の數へたところによると、五十五あるのだが（尤も數へ誤りも存するかも知れぬ事を斷つて置く）此の中

五十三字は二本で一致し、他の二字は蓮成院本に於いては和云々とあるが、觀智院本に於いて和云々と無き物と、其の逆のものとである。だから此の事實から想像しても此の二本の和音に關する注文の相異について伴氏校本は先づ克明に記入して居る事を認め、伴氏校本に於いて和云々につき二本の校異を示して居ないものは、二本で一致するものと認めてよからうと思ふ(蓮成院殘缺本を見ること出來さへすれば斯かる曖昧なことを云はなくて濟む筈であるが、自分としては止むを得ないのである)。さて伴氏校本により二本の和音に關する注文のほゝ一致するらしい事が認められる譯であるが、更に觀智院本に和音云々と無きものであつて蓮成院本では和音云々とあるものが極めて少數ではあるが

斤　禾コン　九の一七右八
爭　禾謝ウ　九の三左行外一の四一右二
孚　禾ソ(禾フの誤リ)　九の三左行外七の七〇左三
判　禾平　八の四七右六
冷　禾音平(平聲の義か)　五の二三左四
爲　禾ヰ　九の三右九・四の一五右八・一〇の四〇右五
戎　禾主　九の二〇右四
滅　禾[]ン　五の四右六五の二三左上欄書入
菓　禾ク禾　八の二二右八
汲　禾丶フ(禾キフの義)　五の九左八

などが存する。觀智院本より蓮成院本の方が多いと迄は云へないにしても、少いと

は云へないであらう。斯かる貧弱な實例しか擧がらないやうな事實を捕へて、運成院本の方が觀智院本より後に出來たと云はうとする譯ではさら〳〵無いが、斯かる事でも薄弱ながらも一つの傍證ぐらゐには成らうかと考へてこゝに擧げた次第である。（名義抄に於ける和音の注文が書史的見地から相當に考慮せらるべきものなる事は、すでに高山寺本類聚名義抄攷（上）で述べて置いた）

（二）次ぎに二本間の注文を比較すると觀智院本には見えないが、運成院本には見えて居る注文が少からず存する事を注意せなければならぬ。

（第五卷）

一七右 滉　ミナキル
二左 滌　カハアム
七
一〇左四 沛　アメサカリニフル
五右 泊　ヲヨブ、アロラカス（誤寫あるべし）
二
一二左六 淖　泥ナリ（新撰字鏡六の一右七に泥也大也和也云々）
一五右一 汾　ナリテ（字鏡集三の一左四にトリテと有れども意味不詳）
一七左六 涇　クム（汲む歟）
二二左一 酒　フルサケ、上　朱、禾去（名義抄一〇の三八左一參照）

八左三 淫　ミタレカハシ
九右 漉　ソヽク
一二左六 潮　ウナツシホ
一四左八 沿　餘尊反（餘專反の誤りならん）
二二左三 得　多則切

二三 右二 洌　サムシ
二三 右三 淳　タスク
二七 右七 誕　徒旱反
二二 左四 沙　玉云所加反泉散石スナコマナコ
二四 左四 ×（讀字の右に音字を書いた字）サキナム（字鏡集 一四の三 二右一 新撰字鏡 三の一 二右四 参照）
二八 左三 訝　皮命反

二三 右七 決　タツ
二六 右三 讙　七雖反
二七 左七 認　而證反（會玉篇九の五左七）

（第八巻）

二二 右八 ×（草冠に馬を書いた字）エ　德
三七 左三 籤　七廉反（七雖反の誤り）
四四 左二 ×（自木二字を屬とし りを旁とした文字）ハナハシラ
五三 右四 餔　アメ
五三 右八 蝕　時力切日月蝕也
六五 左一 鑢　力胡反

三七 右二 ×（竹冠に盧を書いた字）竹中空（新撰字鏡 八の五右）
四三 左二 剡　ワル
四四 右七 刪　所間反
五四 右一 餌　如六反
六三 左四 鋼　徒年反
六二 右四 ×（金篇に爪字）カナマリ、クシリ（鉄クシロ）

（第九巻）

四左 七 畏　又武貧反アミ
一左 七 介　被甲也

藝　文

七右　六　盆　余成切

一三　右四　粥　ヒサク（字鏡集一五の三一右四）

一二　左四　彊　サカヒ、カキ

一三　左一　×（目篇に　字）ユカケ（字鏡集一五の三〇右三）

一五　右九　旛　一番

五九　右八　×（鳥篇に　旁）五各反タツ鶴別名

六〇　左七　×（鼎篇に　鳥に旁）余計反

六三　左二　×（鏡鳥二字を左右に並べし字）キ、シ

五右　八　龍　又音皮倦

九左　五　×（古字に篇とし玉字に旁とせる字）カハライシ

一三　右五　彌　イヨ〳〵、ワタル

二〇　右三　戰　オコク（字鏡集一五の三六右、ウコカ）

五九　右二　鳩　有大海（大毒の誤り）

五九　左八　鵜　鳥加反

六一　左七　×（鄙鳥二字を縦に並べし文字）作席反

（第十卷）

二右　一　×（魚篇に旁を夷）アユ

一三　右二　蟻　キサ、

二一　一右　×（虫篇に雨字）トカケ

六右　四　×（魚篇に礙に旁とす）爪シ（字鏡集八の四九左一）

一〇　左二　蝌　斗、アマカヘル歟

二七　右八　×（風寮を左右に並べし字）ス、シ

右の例以外にも蓮成院本だけに見えた注文で其の意味の解し難きもの、又字形異體にして説明しがたきものも相當に存するが其れらは總て省略した。又觀智院本の注文に脱落が生じた爲めに蓮成院本だけに存するかの如くに見えるものも擧げ

なかつたし、又蓮成院の注文にイと標してあるものも取らなかつた。蓋し蓮成院本の校合に採用せられた其の一本なるものが蓮成院本と同種同系統の本では無くて系統を異にする異種のものではあるまいかと云ふやうな惧れもあるからである。

だがとにかく右に擧げたやうに蓮成院本には觀智院本に見えない注文も存するのであるが、一方此の反對の事實は無きかと云ふにやはり無きにしもあらずであるが、其の中には

續斷、章斷（九の一七左三・四）　　穀（九の三三左八　四右一）

の如くに注文の位置が二本によりほんの少し許り異つて居る爲めに「ナシ」と標記せられたやうなものもあるし、散（九の三　〇右四）御（八の三　六左七）の註文中の或る文字の如くに、衍字である爲め蓮成院本には無いものもあつて、要するに蓮成院本よりも觀智院本の註文の方が多いと認められる例は、僅かに左の如きものが存するに過ぎないのである。

九の六左八に見えし文字の註文中にある鹹地の二字

九の二左三　衾　×　歟（記號の所へは衣字を分割して其の中間へ今字を挿入した形の文字が入る）

五の八右四　湧　字の註文中の都勳の二字

十の二七左三　×（風劉二字を左右に置きし字）の註文中の「風小メク」

是れにより、蓮成院本には見えないで觀智院本にのみ見えて居るが如き註文は極めて少き事が認められるやうである。もとより信友の校合が完全なものであるとは到底考へられず、又其の伴氏校本の轉寫が完全に行はれたとも認められないから、此の種の實例が此の外にも未だ少し位は存することを想像せなければならないにしても、とにかく蓮成院本に見えないで觀智院本に見えて居る註文が其の逆のもの、卽ち觀智院本には見えないで蓮成院本に限り見えて居るものに比較すると、數の少いのであることは認められるであらう。そして斯くの如き現象の存することは、蓮成院本の方が觀智院本よりも後れて出來た事を想像せしめる一材料であらうと思ふ。こゝに斷つて置きたい事は、自分が雜部から實例を擧げなかつた事であるが、其れは信友も「不耐對校」と云つて居る如くに、雜部だけは二本の相異甚だしくて精密に校合することが不可能であるのに基くのであるが、又僅か二十六紙しか無い雜部を比較して例を擧げずとも、雜部以外だけに就いて吟味しさへすれば結論に於いて大過無かる可き事の考へられるからである。

藝文　第貳拾年第九號

蓮成院本類聚名義抄攷（四）

岡田希雄

八

（三）文字排列の順序に就いて云つても、蓮成院本觀智院本二本で相異が存して、前者の順序は妥當であるのに後者のそれは不穩當であると云ふ例が僅少ではあるが、存するのも亦注意すべき事實である。

例へば觀本では第五卷の二十一丁右五行目に「瀞俗滿字又音閼慎也又莫本反」とあるが、さて二十一丁左六行目にまた、此の瀞字とは全然沒交渉の狀態に於いて「滿莫旱反（下略）滿」と見えて居るが、是れは云ふ迄も無く妥當で無い。ところが蓮本では「瀞滿滿」の順序で同じ一箇所に記されて居る。

觀本五の一左に

潍千維反深也澈谷萍谷濰音雍ヒタル濰正濰音維水也萍蒲丁反アハスウキクサ

とあるが、字形の少しも異つて居ない濰字が、理由も無いのに二度も見えて居り、しかも其の音は初めの方のものには「音雍」とあり、後のものには「音維」と見えて居ること、及び萍と萍とは同じ字であるらしいこと（卒字を平字の頭の通つた形に書くことはあるのだから一左八の四）從つて萍を萍と書くことも有りさうに考へられる）から、此の觀本の方には文字配列の順序に妥當ならざるものゝ存することが想像せられるので、蓮本では何うなつて居るかを檢すると

濰子維反深也澈谷音雍ヒタス濰正濰音、維水萍谷萍蒲丁反アハスウキクサ

とあるらしいが（校合が不完全で、はつきりせない點は存する）、これならば「音雍ヒタス」と云ふ五字の注文の所屬が疑はしいだけで、他は觀本に比して不自然なところが無いやうである。

觀本には溝字のところ（五の一左三）に、其の俗體の文字、と思しきもの三種（其の個々の字體は今必要が無いので（イ）（ロ）（ハ）で示す）と熟字とが掲げてある。そして其の順序は

（イ）音鉤谷鰍ミゾ　フカシ　不去（ロ）　汙——牛馬アセミゾ　（ハ）溝上通下正

となつて居るが蓮本では

（イ）音鉤（ミゾ）　谷蹶（フカシ）　（ロ）　（ハ）溝（上通下正）　汗――（牛馬）（アセミヅ）

と成つて居る。斯う云ふ風に符號を代用して濟ませると、何のことか判らないやうであるが、文字配列の順序としては觀本が不可であり、蓮本の方が無論妥當であるのである。

觀本第五の二十四丁右を見ると

詣（渠支反キホフ又古競反）アラソフ（〇下畧）×或競字讀（音讀ヨム）（〇下畧）（×字は言字の下に片假字のルを書いた形の文字を左右に並べた字形）

とあり又同丁左四行目に

△古競字　競（同アキラカ）　誼（アタムムクユ）　⊠（音獨ソシルウラム）（イツハル）（〇下畧）（△字は見字の下に言を書いた字形を左右に並べたもの。⊠字は讀字の右へ又言字を添へたもの）

とあるが、此の後の四字は蓮本では×字と讀字との中間に介在して居り

詣　×　△　競　讎　⊠　讀

の順序で排列して居る譯であるが（尤も×字は蓮本と觀本とでいくらか字體が相異して居り、蓮本では言兄二字を重ねた字を左右に並べた形となつて居る。何れが正しいかを知らぬ同じ競字で形の異るものが三字續く事と云ひ、字形の類似した⊠字

と讀字とが續いて居る事と云ひ、蓮本の方が觀本に比して遙かに穩當である。

觀本五の卅五左六行目にある三字が蓮本では三四丁左八行目に記されて居る。そして字形の類似と云ふ點から云へば蓮本の如くある方が妥當であるのである。

觀本五の一五右三では洛の俗體の字が、何ら關係なき湊字を一字、中に介在せしめて記されて居るが、是れはやはり蓮本の如くに、續いて記載せられてさて其の次ぎに湊字が來なければならぬ。

觀本では洌字五の二三右二の正體の字が洌字の註文中に小さく書かれて居るが、蓮本に於いては洌字の下に同じ大きさで書いてある。是れの方が無論正しい。

さて斯くの如くに一方の觀本では妥當で無いが、他の本では不穩當に配列せられて居ると云ふ相異は、觀智院本と蓮成院本とが如何なる關係を有することを物語るものと云ふ可きであらうか。普通の解釋に從ふと(甲)右の如き相異は此の二本の出來た當初にはまだ無かつた(乙)三本の出來た當初にはまだ無かつた來た當初よりあることであると云ふ見方と、此の二種の解ことであるが後になつて右の如き相異が生じたのであると見るものとの二種の解釋が可能であるが、(甲)の方は此の二本は少くとも右に擧げた諸例の掲載せられて居るあたりは文字排列の順序が全く、それ〴〵原本の儘であるのだ、たゞ二本は既に述

べた如くに異本であつて其の出來た時代に先後があるを以て斯かる相異が生じたのである」と云ふ見方であり(乙)の方は此の二本は其の原本と原本との間では、二本が異本であるにも拘らず斯う云ふ相異も無かつたのであるが後になつて――後になつてと云つても、何時頃と云ふやうな事は想像するのも無意味である――二本の何れか一方に、若しくは二本の何れにも錯簡が生じ、其の結果、原本では正しく排列せられてあつた順序が變じて妥當で無くなり、或ひは原本では不穩當に配列せられてあつたものが、反對に穩當に成つたのであると解するものであるが、此の(甲)(乙)二種の解釋の中で若し(乙)の如き事情が存するのであるとすると、二本の何れか一方若しくは二本の何れにも錯簡が生じたと見るのであるから、文字排列の順序が妥當であるか妥當で無いとか云ふ事から、二本の原本の出來た時代の先後を決定する事は不可能であるが、(甲)の方であるとすると、二本の原本の時代の先後を推定することは先づ可能である。蓋し前に出來た本よりも、後に成りて出來た本の方が完全に近くなると云ふのが理論上實際上あり得べき現象であるからである。

だが此の(甲)(乙)二種の場合の何れの方が、今の場合としては、有り得べきであるか。先づ(乙)の方に就いて考へると、蓮成院本に錯簡の存するのは事實であるが、右に擧げ

た例どもの在るところに錯簡があるか何うかは明かで無い。だが水部〻部言部の三部首に屬する字が、觀智院本と同じやうに一と纏めになつて居り、しかも觀智院本に存する大きな錯簡(註)が無いのを見ると、蓮成院本では此の水部〻部言部の一群には錯簡が無いと見るのが穩かであらうから、從つて後人が手際よく斷簡を寄せ集めて、原本とは相異があるが、しかも原本に比べる正しい順序に配列して今日見るが如き蓮成院本を作つたのではあるまいかと云ふ想像は根據が無くなる筈である。なほ云へば、後人が斷簡を寄せ集めて文字配列の順序を原本以上の正しいものとすると云ふ事が、實際としては不可能事であるのである。後人が斷簡を寄せ集める際には、思慮あり學識ある人が、餘程綿密愼重にやらない以上は順序が惡くなる傾向こそあれ、原本の體裁通りになる事さへも望まれないのである。まして原本の體裁以上に完全なものに成ると云ふことは、先づ絕對にあるまいと考へられる。目次が立派に添へられてある蓮成院本雜部――尤も此の雜部に生じた錯簡現象が、雜部以外に於けるそれに比べて遙かに烈しかつたものなる事は充分想像できはするものゝ――でさへも、その斷簡を寄せ集める際に、失敗して居るやうな人が、斷簡を集めて、文字配列の順序を原本以上に正しくするなどゝ云ふ事は、萬々あるまいと考へられる。

だから自分は錯簡の存することの認められる蓮成院本に於いても、右に擧げた例のところだけは絶對に錯簡の無き事を信じるのである。

次ぎに觀智院本に於ける文字排列の順序の不穩當であるのは、錯簡の結果ではあるまいかと云ふ想像說に就き考察して見るに、觀智院本に錯簡の存するのは事實であるが、其れは自分の調査したところでは唯一箇所あるのみであつて、其の他には錯簡ではあるまいかと云ふ疑ひの生じるものさへも見當らない。しかも其の唯一の錯簡は紙二葉が錯置せられたものである。ところが右に擧げた如き例をも皆錯簡によりて生じたのであらうと云ふ爲めには、各一紙が更に數箇の小斷片と成り、其れらが何人かにより、錯置せられたのであると云ふ事を認めなければならない事になるが、名義抄中で唯一の古寫本たる觀智院本には其のやうな痕跡は全然無いのであるから、若し觀智院本にさう云ふ斷片的な斷簡の存することを認めるならば、其の斷簡は觀智院古寫本の書寫せられる以前に於いて、卽ち鎌倉時代に於いて既でに存して居つた事を認めなければならないのであるが、しかし、作者自筆草本に然う云ふ斷簡のあつたことを認める理由も決して無いし、慈念本にも生じたと考へられない。どうしても顯慶本に於いて生じた事になる譯であるが、しかし然う云ふ事は是れ亦

決して想像できない。蓋し若し其れ位の斷簡が生じる程に顯慶本が破壞せられて居つたならば、其の甚だしく錯簡したところの紙片を寄せ集め纒めて、現在見るが如き比較的完全――自分としては實のところ比較的」と云ふ三字を除いてもよいのである――なものに作り上げる事が果して出來るであらうか。いかに綿密なる注意が拂はれても、斯う云ふ字書と云ふやうな性質のものが、一度甚しく錯簡した後で再び原形に、また原形に準ず可き位の姿に復原する事が可能であるとは考へられないのである。

で觀智院本には、何時生じたのであるかは知らぬが、とにかく二葉の錯簡の生じた事は是れを認めはするが、更にもつと細い錯簡が、更に多く生じたと云ふ事、殊に右に例として擧げた條々に於いて、然う云ふ錯簡が生じたと云ふ事を認める事は決して出來ないのである。

次ぎに(甲)であるが、斯う云ふ事もあり得ない。何故かと云へば、著者が一つの書を著して相當な物を作りながら、其れに滿足出來ないで第二稿を書き、更に第三稿を書くと云ふ風に稿を改めて行くと云ふのは何の爲めであるかと云ふに、無論、第一稿に著者として飽き足らぬ點があればこそ第二稿を書き、更に未だ其れに滿足できない

で再三訂補するのである。第一稿を更に改惡せうとて筆を加へるものでは、無い。だから名義抄の著者が蓮成院本を改惡して、觀智院本を作るなどゝ云ふ事は絶對に有り得ない。尤も著者の不注意により改惡となつてしまふやうな例が無いとも云へないが、其れは高山寺本と觀智院本との關係に於いて見られるところである)、しかし一般から云つて、初稿よりは第二稿の方が宜しくなり、第二稿よりは第三稿が優秀なものとなると云ふ事を、原則的に認めて支障あるまい。改惡は極めて希れな特殊の場合であり、改善訂補は一般的事實である。今の觀智院蓮成院二本の關係も、蓮成院本が觀智院本よりは後で出來たから自然觀智院本よりは優れた點があるのであらうと解釋する方が、穩當ではあるまいか。其の反對の解釋は存するとは思はないが、縱ひ其れを想像するにしても其は强ちなる鑿說であると考へる。

〔註〕觀智院本に錯簡のあると云ふのは、第五冊水部に存する。卽ち九丁右第一行に濾字があるが、音義に關する註文が無い。しかるに六丁左八行には同じ字があつて「音慮漉也」と見えて居る。是れにより六丁左八行と九丁右一片とが密接なる關係のあるのを知る。つまり此の所は六丁左八行より九丁右一行目に續くべきである。しかして、八丁左八行目には「汨、一羅漑」とありて紙が終り、五丁右第一行は

汨字で始まつて居るから字形から云つて「六九十……」「七八五」に續く可きである。七は或ひは四に續く可きであるかも知れない。要するにこゝの所は「……四七八五六九十……」とある可きであらうか。

九

（四）次ざに文字を其れ〳〵の部首に所屬せしめる場合の注意如何を考察して見る。

爭字は一部「一の四」右三に正俗二體が見えて居り（但し正俗二體であるとは斷つては居ない）俗體の方には「アラガフ　イカソ　ナンソ　アラソフ　キホフ　イハク」の六訓あるのみにて音も註記して居ない。正體の方の註文にも亦音註は無くて唯「爭爪部」と見えて居るだけであるが、此の事實から、本書作者の心中を忖度するに、彼れは爭字はも一度爪部のところにも出して其處で音を施す氣で居たらしく考へられる。だから爪部にも爭字は當然見えて居らねばならない筈であるが、事實は觀智院本では爪部に於いて爭字は見出せない。だが蓮成院本に於いては明かに見えて居る。そして註文は少し變つて居て

爭　側整メ　アラカフ　アラソフ　クラフ　イカ　イカンテカ　禾謝ウ

と成つて居る。さて斯う云ふ事實を說明するには二本の時代の先後と云ふ事に結

びつけて、觀智院本を書いて居る當時に於いては、爭字を爪部に收めると云ふ意圖は、失念して居たか何かで、終に實現せられずに止んだが、觀智院本より後に成りて出來た蓮成院本に成つてから、實現せられ、さて音も二樣に註記せられるに至つたのだと解釋すべきではあるまいか。(訓の數は蓮本と觀本とで一致せないのであるが、蓮成院本にしたところで、爭字が丨部にも出て居るのであらうと云ふ事は想像できるのであるから、觀智院本所見の如き訓が其處にて記されて居る事も認められるのである。故に是れ問題とするには及ばないと信じる)。

爲字が觀智院本では爪部に見えて居ないで、單に雜部(十の四 ○右五)及び、八部(四の一 五右八)に見えて居るのであるが蓮成院本では、爪部にも出て居りしかも丁寧にも「在雜部委(○和 音キ)」と註してある。字書としては爲字が爪部に出て居ない觀智院本と、爪部にも出て居る蓮成院本と比較して、何れが比較的に完全な體裁であるかと云ふならば、今更云ふまでも無いことである。そして蓮成院本が斯う云ふ風に、親切に、念入りによく行き屆いて居ると云ふ事は、蓮成院本の方が觀智院本よりも後に成りて出來上つたが爲めではあるまいか。蓮成院本の方がさきに出來たとすると、著者は爲字だけに關しては、完全に近い蓮成院本を殊更に改惡して不完全な觀智院本を作つた事になるが、斯

う云ふ事は、書物が訂正増補せられ行く際には、次第に完成せられて行くと云ふ事實と相反する不合理な想像説であるから、自分は是れを取らない。（因みに云ふ、爲字は現在の脱簡の多い不完全極まる蓮成院雜部に於いては見當らぬ。だが目次に与部の存するのと見ると、爲字が雜部に見えて居たことは認められる、脱簡のために現在の本には見えないまでの事であらう。爭字が觀智院本では第一卷丨部には爪部にあると、註してあり乍ら、實際は爪部に漏れて居ると云ふのと同じ現象であるとは考へられぬ）。

觀智院本雜部十の六三左に「慈氏軌眞言字等」として記載せられてある中の四字が、蓮成院本では戈部（觀智院本九の二二左）に見えて居る。蓮成院本では雜部にも存するのであるか何うかは脱簡があるので例により判らないが、文字の所屬としては、蓮成院本の如くあつてしかる可きである。若し雜部にもあるとすればさらに結構である。

なほ九の四丁左七行と八行とに同じ文字が二字づゝ三度見えて居るが、蓮成院本では、後の方の二字が見えないのである。無論その方がよろしい。

ともかく右の如き事實からでも蓮成院本をば觀智院本に比べて後出の書であると云ひたいのである。

（五）次ぎには蓮成院本の方が語彙が豐富であることである。例へば水部（觀本五の二二左）の終末のところには沙字の次ぎに二十七字が見えて居る。これらが伴氏校本に於いて、何うして此所に記されるに至つたかと云ふ事情は、信友の校合がしば〳〵云ふ通りに餘りに粗であつて、其の爲めに確かな事が判らないのである。（甲）蓮成院本では沙字の次ぎに是れだけのものが纏めて記してあると云ふのであるか、（乙）信友が二本を對校した時に、觀智院本で見つけられない文字（綿密に調べたならば見つけられるのであらうが、急いでやつたゝめに見つけられないと云ふやうなものもあるであらう）をこゝへ集めたと云ふのであるかが明かで無く、又（甲）であるにしも（イ）果して蓮成院本著者自らか記入して置いたものであるか、それとも（ロ）斯う云ふ字書類にはよくある事であるが、後人が勝手に書き添へたものであるかも明かでないのであるが、斯う云ふ例は他にも存する。

冫部（五の二三左一）

爪部（九の三右八、左一）

斤部（九の一八左二）

矛部（九の十九左二）

戈部(九の二二左四)
支部(九の三二左四)
車部(九の四七左一)
虫部(十の二一右三)
西部(十の三二左五)

さて是れらの增加語彙が果して如何にして伴氏校本に加へられるに至つたかとすべきであるか。しかして自分として、此の場合に解決したき事であり、又解決せなければならないと考へるものは(甲)であるか(乙)であるかと云ふ問題よりも(甲)の(イ)であるか(ロ)であるかと云ふ事である。一體或る人が名義抄の如き字引を述作する場合を考察するに、彼れは一と先づ完成した後に於いても、何かと參考書を渉獵もするであらうから、字書の語彙の次第に增加して行く事が考へられる。又特に參考書として讀むのでは無くて、手當り次第に亂讀する書物にしても、辭書の內容を豐富にせしめる爲めの材料を供給することであらうから、字書の淸書本、若しくは稿本が著者の手許にある期間が長ければ長い程、概して語彙の豐富に成り行く事が想像できるのである。故に原則として、語彙の增加はあつても減少は無いものと考へてしかる

可きであらう。其の增加と云ふ中には、新しき文字の加へられる場合もあるであらうが、熟語の加へられる場合もあるであらう、又同じ文字であり乍ら、始めの程は或る一つの部首の中にのみ收めて置いて事足れりとして居たものをば、後で檢索を容易ならしめると云ふ意味から、然る可き他の部首のところへも挿入せしめると云ふ場合もあるであらう。ともかくも然う云ふ風にして、辭書の內容の增加は、時間の經過と比例して增加して行くであらうと云ふ事が考へられるが、同時に又原著者以外の人が、自分の一存で勝手に內容を豐富にして行く事も亦考へられる。色葉字類抄に十卷本が出來、節用集に異本が多く生じた事などは、何れも原著者ならざる人が書き加へて行く――無論まれには省略することもある――事に基くのである。さて蓮成院本の場合に於いても此の(イ)(ロ)の何れかで無ければならない。しかして是れを決定する事は容易で無いが、九卷廿二丁左の例の如きは其の體裁より見て、原著者の記入と見るのが穩當であらう。三丁にあるものも體裁から云つて原著者の記入であると見たい。殊に

爭　側莖反　アラカフ　アラソフ　クラフ　イカテカ　イカシテカ　禾謝レウ

とあるものを、觀智院本(一の四)に、「禾謝レウ」の註文が無くて「爪部」とあるのに對比すると、爭

字を瓜部にも收載したいと云ふ觀智院本時代の原著者の希望が遂成院本に成りて實現したとも云へる。「禾謝ゥ」(和音シャウの義である。ウの肩にある符號はレで無くて鈍角で、線の傾きも其の鈍角が丁度上に向いて居る形であるらしいが、印刷の便宜上レで濟ませたのである。何故斯う云ふ符號があるかは歸納的研究によつても不明である。必ずしも字音のm尾に尾に對するng尾の特殊標記でも無いやうであるがしかし此の符號は名義抄に屢々見えて居り獨特の符號であると考へる。金光明最勝王經音義などに見えて居る符號と同系統のものであるやうだ)と云ふ珍しい標記法も、名義抄原著者の加へたものと見るのが穩かではあるまいか。尤も遂成院本第一冊の一部のところに存する筈の爭字の註文に「禾謝レウ」とあるので原著者以外の人が、其れにならつて此所へ書き入れたのであると云ふ事も考へられるが、整說に近くは無からうか。

此の他、何の例を檢しても其の體裁の類似から云つて、原著者の加筆であると見ること出來るものゝみである。無論今も云つた通りに、體裁は後人にしたところで、眞似せうと思へば容易に出來るのであるから、體裁の類似と云ふ事だけで、是れらが原著者以外の人の加筆で無いと斷定するのはよろしくない事は知つて居るが、同樣に

又、原著者の加筆で無いと斷定する理由も無い。しかし此の兩種の推定說を比較すれば、原著者以外の人の加筆と解する方が穩說に類すると云ふ感じのあるのは否定できまい。自分は極めて單純に原著者の加筆であると認める。

そして是れらが本文中に散在して居つたのを、信友が斯くの如く纏めたものであるにしても、又初めより斯の如く纏めてあつたものであるにしても、要するに遵成院本では語彙の多少增加して居ることは認められる。尤も增加と云ふ中には單に收載せられるところが增したに過ぎないものもある。例へば野字が遵成院本では矛部にも收載せられて「野音也ノイヤシ禾と平曠野アラノラ」あるが、觀智院本を見ると、第二冊の田部五五左六に「野ノノラ イヤシ アラヘ」また雜部十の五〇左八に「野音也反イヤシ禾平曠—アラノラ」と見えて居るが、遵成院本も恐く田部にも亦雜部にも存するのであらう(尤も現在の脫簡本雜部には見當らぬ)。して見ると、野字が矛部にも存すると云ふのは單に、檢索に都合よいやうにしたまでゃある譯だが、しかし名義抄としては、語彙が遵成院本に於いて增加したと云はなければならない。さて此の野字の如き例も存するが、しかし要するにやはり遵成院本では語彙が增加して居ると云つてよいであらう。

遵成院本の如く斷簡の錯簡の生じたものには文字の脫落もありさうなものであ

るが、事實としては斯くの如くに語彙の增加と云ふ現象が認容せられる。從うて蓮成院本の方を觀智院本に比して後出の書と推定することも認めらるゝやうである。

蓮成院本類聚名義抄攷（五）

岡田希雄

一〇

(六)次ぎに、既でに述べた事ではあるが、觀智院本雜部と蓮成院本雜部とを比較する

と、蓮成院本雜部の方が觀智院本のそれに比して、はるかによく整頓して居ると云ふ事も、此の二本の時代の先後と云ふことを考察するに當りては見逃せない事實であらう。もとより此の二本は異本であつて文字配列の順序も異り、一部首に收められて居る文字に出入もあり、其の上蓮成院本雜部の方では脱簡錯簡も存することであるから、此の二本を精密に比較することは不可能であるのは云ふまでも無いが、蓮成院本雜部が整頓して居り、觀智院本雜部が亂雜であると云ふ事は、別段二者を精密に比較して見ないでも、一寸比べて見れば容易に何人にも認められるところのものである。然して斯かる事實に就いては、既でに本稿の第二回のところで述べたのであるが、念の爲めも一度述べると、觀智院本では、一部首に屬する字と覺しきものゝ寄せ集め方が精しくは無くて、甲の部首に屬すべき文字が數箇所に散在して居るばかりで無く、其の中の一字か二字かゞ乙の部首の中に混入して居るやうなことも珍しく無く、從うて一體何の字から何の字までが同一の部首に屬する文字群であると見るべきであるかゞ判りにくい所へ、更に其の上に、部首が變つても行を改めると云ふ事をして居ないから、愈々甲の部首に屬する文字群と乙部首に屬する文字群との區別が明瞭で無いので、此の雜部をば一體何箇の部首に區分したらばよいのであるかな

どゝ云ふことさへも一向に見當がつかない。然るに斯う云ふ亂雜不體裁は蓮成院本では絶えて見ないところである。尤も蓮成院本にも錯簡があつて、錯簡のあるところは亂れて居るが、今自分の云ふのは然う云ふ錯簡の無い部分についてである。蓮成院本では一つの部首に屬する字は、きまりよく其の部首のもとに集合して居り部首がかはれば行もかはつて居るから、何の文字から何の文字までが何の部首に屬するか、又一體何箇の部首に區分せられて居るかを見わけるのは容易であるが、更に部首目次までも添へられて居るのである。

また觀智院本では雜部四十二丁左に雲字を篇とする文字が正體俗體取り交へて八字記載してあり、又五十八丁左にも黍字に屬する文字が六字見えて居るが、既に法下の卷卽第七冊に黍字兩字の部があつて、雜部に收められる必要が無いのであるが、著者の失念からでもあらうか、斯うして雜部に收められて居る。そして蓮成院本では雜部の部首目次に雲や黍は見えないから本文にも其れらのものは無かつたものと見られる。(本文には無論見えないが、本文には脫簡もあつて一概に云へないことであるから今は單に部首目次から想像するのである)。要するに、蓮成院本の方は體裁が整つて居り、觀智院本は亂れて居ると云ふ可きであらう。

また次の如き例がある。

蓬本雜部七丁右六行目、冂の部首のところに用字が擧げてあつて「在月部」と註してある。つまり、用字を今此の冂の所にも擧げて居るが、しかし其れは單に檢索の便の爲めにこゝにも出して置くのであつて、月の部に出て居るのを見たらばよいのであると云ふ意味であらう。甚だ親切な注意である。單に「某部」とあるやうな例もあるが同じことである。現在の漢和辭書には大體此の點の考慮がめぐらされて居るが、同じ現在のものでも、やゝ舊式なるものでは此の配慮が缺けて居る爲めに、使用者をして徒らに苦しめるものもある。漢和字書としては何うしても斯う云ふ風に檢索の自由自在と云ふ事が考慮せられなければならない。

八右五弱 在弓部　一一右六甥 在男部　一一在四主 主部
一四右六歔 在人部　一四左四飜 羽部　一四左六釋 在米部
一七左四彗 在生部　一八左六秦 禾部　一八左七舂 在臼部
一九右一養 食部　一九右四黎 在黍部　二一左七東 木部
二四左四隷 在幸部　二六右六却 在卩部　二六右三牽 牛部

是れらは印刷上不都合の生ぜない範圍内で擧げたのであるが全部では「在某部」の

例が三十二例「某部」とあるものが七例存する。又「如某部」とある例も他に四例存する。（一三左七、一四右三、四右五、一四右六）。例へば冎を篇とし皐を旁として文字三一四右に「如冎部」とある如きものが其れである。「冎部」と云ふのは同じ雜部の部首名であつて右の「如冎部」と云ふ註文の存する文字は其の冎部のところ一八右にも見えて居る。此の例の部首名としては、「如口部」「如部冎」「如勾部」「如厶部」の四例あるのみで、何れも雜部の目次に現はれた部首名である。「如某部」が何う云ふ意味であるか判斷しかねる。

ところで、觀智院本雜部を檢すると何うであるかと云ふに「可有某部」と云ふ形式になつて居る。例へば三五丁左四行目に學を篇とし文を旁とした文字（學字の異體である）を擧げて「可有文部」と注して居るが如きものである。

三六右四可在火　三六左六弟可在八部　三九右一可在一部
三九右三可在十部　三九左六印可在卩部　四〇左三番可在田
四〇左四釋可在田　四〇左一可在田部　四四右七可在一部
五一右七可在三部　四六左七可在上部　四六右五可在一部
四五右八商可在立部

此の外「某部」とのみある例が七例存する。是れらも亦むろん文字檢索に關係した

ことであるだらうが、斯う云ふ檢索の便宜に關する注意が、蓮成院本に比較すると少いのである。斯う云ふ事實から考へると、單純な考へ方ではあるが、蓮成院本の方が、同一の本の發達して行く徑路に於いて、比較的進歩した形であると云つてもよからう。從うて蓮成院本の方が後出のものであると云つても大きな支障はあるまいと考へられる。

とにかく右の如き譯であるから、蓮成院本の方は體裁が比較的完全であるが、觀智院本の方は全く不完全であることは爭はれない。尤も兩本の完不完を說くに當りては目次の有無は取り除いて考へるべきであらう、蓋し其の雜部の目次は蓮成院本原著者が添へて置いたものであるとのみも云へないからである。

また蓮成院本を比較的完全であると云ふのも、蓮成院本の中で錯簡の無いところ卽ち原著者の原本のまゝの體裁であると考へて然る可き所のみに就いて云ふこと である、そして其の反對に觀智院本雜部には錯簡の存するのであらうと云ふ事は想像出來ないことであるから、蓮成院本が比較的完全で、觀智院本が亂雜であると云ふことは二本の原本に於いて既に然うであつたのであると云ふ事になるのである。

さて然う云ふ風に二本の間に體裁の完全亂雜と云ふ相違があるとする場合には、完

全なる體裁のものが後に成りて現はれたとすべきであることは云ふまでもあるまい。不完全なものが訂補により比較的完全な物と成つて行つたと考へることの穩當であり自然であるが、其の反對を想像することは――極めて特殊な事情の存する場合はともかくもとして――不合理であると信じる。であるから他の理由も必要ではあるが、此の雜部の整頓亂雜と云ふ一つの事によりても、蓮成院本を以て、觀智院本に更に手の加へられた後出的なものであると認めることが出來ると思ふ。雜部以外のところがよしや兩本に於いて全然一致するにしたところで、亂雜なる雜部を有する觀智院本よりは、比較的完全なる雜部を含むところの蓮成院本の方が、後れて現はれたものなることを認めることは決して不合理では無い。

一一

實のところ此の二本では、雜部以外では大した相違が無いために校合の容易であつたと云ふことは、信友の言により充分窺ふことが出來る。そして實際自分が伴氏校本の記事の中から二本の相違を物語るやうな事實を拾ひ集めやうとした事は、豫期に反して、あまり著しい效果を收めることは出來なかつたのである。然う云ふ二本であり乍ら雜部に至りては、大裂裝な云ひ方ではあるが、霄壤の差が存すると云つ

ても支障が無いのである。斯う云ふ相違は如何にして生じたものであらうか。雜部以外のところに於いても雜部と同じやうに平等に同じ程度の相違があると云ふのであるならば、觀智院本から、飛躍的に、または徐々に、遍成院本に進歩發達して行つた際に、全體的に訂補の筆が加へられたものであらうとして、首肯もできるのであるが、特に雜部に限りて相違が甚しいと云ふのは解釋に苦しまなければならない問題であると云ひ得る。

案ずるに觀智院本雜部は極めて亂雜なるものである。何しろ雜部と云ふのが設けられたと云ふ事が、此所へ、所屬部首に疑ひのあるもの、又部首檢索の面倒なもの、又は其の部首に屬する文字僅少にして一つの部首をたてるにも及ばないと考へられるやうなものを、集めて置くと云ふ目的からであるから、雜部は其の名の通りに雜然たる物であるのが、名義抄の第一稿時代に於ける面影であつたであらう。そして其れが次第に訂補せられ行きて觀智院本雜部ぐらゐの程度に整頓せられもしたのであらう。ところが、其の觀智院本にしたところで極めて亂雜なるものであるから、是れを改良する餘地の充分存することは云はずして明かである。であるから無論著者――殊に研究心が強くて自著を完成したく思ふ念の強い人――も充分雜部改良

の必要を認めたので、根本的に大改良を加へたものではあるまいか。大體斯う云ふ憶測で不都合は無いと思ふ。

一二

要するに蓮成院本は觀智院本よりも後に現はれたものであると自分は考へる。然らば然う推定するに當り反證は無いかと云ふに反證として擧げてよいかと思はれるものが一つ存する。其は卽ち、或る文字を擧げて其の文字の熟字を記す場合に觀知院本では

河（上河カハ 禾又カ） 天―アマノカハ 漢―同 銀―同 半天―キノウツホノ水

と云ふ風に記して居るのに蓮成院本では、

河（上河カハ 禾又カ） 天―アマノカハ 漢―同 銀―同 半天―キノウツホノ水

と云ふ風に記して居ると云ふことである。（便宜上觀智院本式を熟字分註式標記と云ひ蓮成院本式を熟字獨立式標記と稱することゝする）。

一體斯う云ふ字書が編纂せられて行く場合を、自分自身で編纂する氣になりて考へて見るに、熟字の記入は概して、他の單字の記入に比しては後れ勝ちのものであらう。むろん名義抄の著者が、名義抄に類したやうな熟字に關する考察の相當豐富な

ものを參考書として手許に有して居た場合には、熟字と單字とを同時に書く、卽ち或る單字を擧げて同時に其の直ぐ次ぎに熟字を擧げることも出來るであらうが、さも無くば先づ概して熟字の記入は後れ勝ちのものであつて、單字の記入後に思ひつくまゝに又は何かの書に出て居るのを見るがまゝに書き入れて行くと云ふ態度であらう。たとひ名義抄式の熟字に關する考慮の拂はれて居るものを參考した場合に於いても、其れに見えて居る熟字で滿足するとは限られないから、後で思ひついたもの、氣づいたものどもは、やはり後れて記入せられて行く事が考へられる。さて然う云ふ風に後から記入せられて行く場合には、書き入れる可き餘裕の豐富にある時はいさ知らず、さも無き時は、或は文字の下に分註式に小さく書き入れるより外には道が無いであらう。無論場合によつては行列の外まではみ出ることもあらう、また欄外に記入せられることもあるであらう。要するに然う云ふ風に小さく書かれるのが普通の現象であらう。しかして其の稿本が淸書せられると成ると、稿本では分註式に記されてあつたものが、獨立式に大きく記入せられると云ふことのあるのは自然的現象である（無論分註式のまゝで淸書せられる場合もあるであらう）。さて斯くの如くにして一度淸書せられた本も止まること無き著者の不斷の努力によりやが

ては其の中へまた單字なり熟字なりが次第に多く書き加へられて行く事が想像できる。そして然う云ふ場合にはやはり今云つた通りに、分註式に記されることが考へられる。

宇書の內容の豐富に成り行く徑路は先づ右に述べた如きものであらう。そして自分は其の分註式は獨立式に比べると整頓と云ふ程度に於いて一段劣るものではあるまいかと考へるのであるから、獨立式の觀智院本よりは後れて出來たものと見るについては、蓮成院本の分註式である點がいぶかしく自分には感ぜられるのである。自分としては蓮成院本も亦やはり獨立式であつて然る可きであると考へるのである。だから斯う云ふ事實は、蓮成院本が觀智院本よりも後出のものであらうと推定するには大きな障害となり得るものではあるまいかと考へる次第であるが、其の分註引であると云ふことも信友が、

蓮成院本隸本字下割行分書、共分書者混在分註中或裂在左右行加之寫誤甚多有殆不可讀者

と云つて居るのによつた迄であつて蓮成院本のテキスト其の物を實際見たのでは無いから、此の點に就いて私見を述べることは出來ない。今は、蓮成院本が分註であ

つて獨立式では無いと云ふ事實に關する解釋は全部留保して他日に讓り、此の點以外の理由どもから、蓮成院本を觀智院本よりも後出のものであらうと推定したく思ふ。

要するに蓮成院本は觀智院本に比べると後に成つて現はれたものであらうと想像できるやうである。但し觀智院本から直接に蓮成院本が出たのであるか、其れとも更に二本の中間に一種乃至數種の本が介在するのであるか何うかは判らない。

さて蓮成院本が觀智院本よりも後に出來たものなることを想像する今に於いては、同じく觀智院本よりも後に成りて現はれたと考へる外なき西念寺本と蓮成院本との關係は如何、同一の本であるのか、異種の本であるのか、異種であるとするならば更に其の先後は如何と云ふ問題に觸れる事に成る譯であるが蓮成院本が五冊目以後の殘缺本なるに反し、西念寺本は伴氏校本所見のものは第一第二冊のみであるから、兩本の關係を考察する手がかりとては皆無である。但し西念寺本は熟字分註式では無いのであるから此の點からで考へると異種の本であるやうである。

一三

自分は蓮成院本に就いて冗說した。しかも其れは既に最初に斷つて置いた通り

に、殘缺本のテキストを全く見る事なしに、單に伴氏校本のみによつたものであるに過ぎない。しかも又其の伴氏校本は其の校合に甚だあき足らぬ點のあるものであり、更に自分の見ること出來る唯一の伴氏校本が、信友の手澤本では無くて、少くとも二度の轉寫を經たものであるから甚だ不完全なるものである。なほ又自分は此の文を物するに當り觀智院の古本に當つて見ることもして居ないのであるから此の冗漫なる蕪文が全く砂上樓閣的なもの、否むしろ空中樓閣的なものであることは云ふ迄も無い。此の蕪文は然う云ふやうに不完全な材料に基いて斯うも考へられようかと云ふ私見を述べたに過ぎないのであるから、他日蓮成院本のテキストを見た場合に自分の解釋が全く今とは正反對な結論に達するかも知れないと云ふ事を自分はひそかに覺悟して居る。それも考證的研究に於いては止むを得ないことである。とまれ自分は今後蓮成院本のテキストの發見に努力し、發見のあかつきには其雜部を中心として從來述べ來つたやうな觀察點に立脚して再び二本の關係を考へなほして見たく思ふ。

最後に雜部を中心として得た憶測により名義抄諸本の關係を左に圖示して置く。

靈鷲院本六帖字書(佚)→高山寺本(殘缺)→觀智院本

西念寺本(殘缺、但し所在不明)

蓮成院本(殘缺、但し所在不明)

(大正十一年稿・昭和四年七月廿六日再稿了)